
Flower Cake

ぱぺっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Flower Cake

【Nコード】

N9530Z

【作者名】

ぱぺっち

【あらすじ】

灰色の浪人生活を送る宮前照太みやまえしやうたは叔父のケーキショップでバイトをしている。そんな彼の前に現れたのは、二軒先のフラワーショップの長男で三つ上の幼なじみ、片桐まどか。今日もまどかはケーキを買いにやってくるのだが、久しぶりに顔を合わせた幼なじみに対して照太は素直になれなくて……ほのぼのラブストーリーです。

第一話 花屋の君にケーキ屋の僕

「……ありがとうございます」

照太しょうたの言葉はそっけない。

それなのに、目の前に立つ彼は去ろうとしない。

日射しはまぶしいのに凍えるような冬の日の午後、照太は叔父の経営するケーキショップ『あい』のレジに立っていた。

寒い外とは裏腹に小さな店内は暖かく、バターや甘いクリームそしてほんの少しバニラの芳しい香りに満ち、まるでこの中だけ先に春が訪れたようである。

素朴だがどこか可愛らしいケーキたちが陳列するガラスのショーケースをはさみ、照太はスラリと背の高い青年・まどかと向かい合っていた。まどかは二軒隣のフラワーショップ『Cieie』の長男で、照太にとっていわゆる『ご近所さん』である。

「忙しくないんですか」

「んー、まだ地元ちよちよに戻ってきたばかりだしね。少しゆっくりしようと思って」

「じゃあ荷ほどきとかで忙しいんじゃないですか」

照太のセリフはまるで早く帰れ、といわんばかりである。

それはこの十日間ほぼ毎日通ってくる常連客に対して、ましてや幼なじみに対する態度ではない……もしここに彼の叔母がいあわせたら、きつともものすごく怒っただろう。

幼なじみ、ね……ホント小さいころしか仲良くなかったけど。

照太は目の前に立つ、柔和で整った顔をフワリとほころばせた男をにらみつけた。こんな風に微笑まれ、親しげに話しかけてきたのは何年ぶりだろうか。

小学校以来じゃん……なんだよ今さら。

小さい頃はよく遊んでもらった。

おやつも一緒に食べたし、宿題も教えてもらった。本当の兄弟のようだった。

……でもそれは、照太が中学校にあがるまでのこと。

新しい制服に身を包んだ照太を前に、まどかはまゆをひそめて言ったのだ。

『なんだ、もうただの可愛い弟じゃなくなっちゃったね』

その言葉に、どれだけ照太がショックを受けたことか。

それ以来、二人は別々の生活を送り始めた。まどかは同級生とつるみ、彼女を作り、そして都内の某有名大学へと進学してこの地を去った。そして照太も照太なりに、まどかのいない生活に次第に慣れていったのだ。

だから今こうして向けられた微笑も親しげな口調も、かつて失ったものだ……それが何年も経って突然再び与えられ、照太には素直に受け入れる準備ができてない。だからつい冷たい態度、そっけない口調になってしまう。

今さらそんな態度……迷惑だ。

まどかはシンプルなクリーム色のコート姿で、カフェオレ色のやわらかそうな髪を肩の上でふんわりと揺らしている。昔から変わらない人目を引く華やかさが、なぜか照太を落ち着かなくさせる。

それにしても毎日ケーキ買って食べてて、よく太らないな……
…こんなに甘党だったっけこの人？

そんな風に照太が考えていると、まどかは「あ、そうだ」と思いついたように切り出した。

「なんの花が好き？」

「は？」

「おいしいケーキのお礼」

照太は困惑したように眉をひそめた。

「お礼なんていりません、お代金はいただいていますし。そもそもこのケーキは叔父が作ったもので、俺にお礼を言われても困りますから」

「だから気を使わなくて済むように、うちの花をプレゼントするよ。なんの花が好き？」

照太は一瞬、季節外れのヒマワリとか言っただけで彼を困らせてやりたい衝動に駆られた。しかしそんな意地悪するより彼には早くお引き取り願いたかった。だってもうお会計だって済ませたし、ケーキの箱だって渡したのだから、これ以上長居されても……困る。

そう、困るんだよ……なに話したらいいか分かんないし。

だからつい、言ってしまったのだ。

「……だいたい花なんてもらっても、水やりとかメンドくさいし」

口にしてから、照太はさすがにこれは失礼だったかも、と顔をあげると……なぜかうれしそうに身を乗り出したまどかと目が合った。

「つまり、手間のかかる鉢植えより切り花の方がいいんだね」

「ちが、そういう意味じゃなくて……切り花だって毎日花瓶の水を取りかえなきゃいけないじゃん」

照太は叔母の行動を思い出して顔をしかめた。生花の好きな叔母は時々まどかの店で切り花を買ってきては居間に飾っているが、毎朝かかさず花瓶の水を取りかえている。

「そっか、じゃあ鉢植えで世話が簡単なのがいいね」

「いや、そうじゃなくて……だから……やっぱり、もういいです」

はああ、と照太はため息をついた……『この人に何言っても無駄だ』と眉をひそめる。

「忙しくないんですか……」

三度目となる問いかけに、まどかはふと首をかしげた。

「君はどうなの？」

「……俺は忙しいです。このあと予備校行かなくちゃならないし。叔母が買ひ物から帰ってきたら出かける仕度しなきゃ……」

「何時まで？」

「え？」

「この店番」

「あ、ええと……四時までだから、あと十五分くらい……」
「そっか」

すると、まどかは拍子抜けするほどあっさりと店を出ていった。

なんだっただ、一体……。

でも彼が戻ってくるまで長くはかからなかった。

少し息を切らしたまどかが再び店の扉をくぐったときは、照太がちょうど店番をあがろうとエプロンを外しかけたところだった。

「はい、コレ」

まどかが差し出したのは、鉢植えのサボテンだった。

「名前は『月世界』……君の部屋の窓際に、この子をおいてもらいたくて」

まどかの妙な迫力に押され、照太は思わず鉢植えを受け取ってしまった。

「で、でも……俺、植物なんて育てたことないし」

「お水はあげなくても大丈夫だよ。たぶん来年の春まではね」

「え、そうなんだ……」

来年の春、か。

その頃には受験勉強も終わっているに違いない。

きつと鉢植えのひとつやふたつ、水をあげる心の余裕だって生ま

れるかも……と、つい納得しかけた照太に、まどかはさりげなく言葉を重ねた。

「この子はきつと君を好きになるよ……僕みたいだね」

「え？」

「なんでもない。じゃあ、また明日」

今度こそ、まどかは店を出て行った。

あとに残されたのは、半ばぼうぜんとした照太と、照太の手の中にちんまりと収まっているサボテンの鉢植え……どうする、このサボテン？ というか……どうする、照太！？

第二話 帰り道

「で、宮前はとうだった？」

「ん……ちよっとだけ上がった」

マフラーに顔をうずめた宮前照太みやまえしょうたの声はくぐもって、いつもに増して聞こえにくい。隣を歩くクラスメートも、そんな照太の様子に眉を寄せた。

「なんだよ、順位上がったくせに暗えなあ。なんかあったのか？」

照太は、この口が悪いけどおせっかい焼きな親友の言葉にあわてて首を振った。

「ゴメン、なんでもないよ……ちよっと寝不足なだけ。綾瀬こそどうだった？」

「落ちた。前回の模試も悪かったし、俺マジやばいんだよなー。宮前の心配してる場合じゃねーってか」

二人の話し声が乾いた夜の空気に吸い込まれていく。

午後9時過ぎの駅前通りはサラリーマンやOLであふれ、寒さを振り切るようにそれぞれ帰路を急いでいた。

なんで帰ってきたんだろう……あの人。

駅前にいた大学生らしきグループを横眼で追いながら、照太はまどかのことを思い出していた。きつとまどかも、こんな風に大学の友人と一緒に飲み会とかに出かけるのだろう。

まだ照太が中学生の頃、当時高校生だったまどかをよく駅前で見かけた。地元でも有名な進学校のブレザー姿の集団は人目を引き、特にまどかのグループは目立つので女子高生だけにあきたらず、照太の中学校の女子の熱い視線をも集めていた。

『ねえ、宮前君ってまどか先輩の近所に住んでるんだよね?』

『まどか先輩って彼女いるの?』

『今度まどか先輩のこと紹介してよ!』

『ねえねえ聞いた? まどか先輩また新しい彼女と歩いてたんだってさ……。』

「……ってさ、おい宮前。聞こえてっか?」

「えっ、ごめ……何?」

「だーかーらー、明日は無理って話。呼び出しくらってさ、マジ憂うつ」

綾瀬は首をすくめるようにして白い息を吐いたので、細いフレームの眼鏡が曇ってしまった。頭はかなりいいいくせに、受験当日インフルエンザにかかって倒れた不運なこの親友は、照太と同じ予備校へ通うがクラスのレベルが全然違う。

「呼び出っして、担当講師は誰だっけ?」

「坂口。マジ勘弁してほしい」

「なんで? 坂口先生って人気あるじゃん」

「オレは嫌い。なんかいけすかねーっつーか……とにかく、そういうことだから明日は勉強会ナシな。代わりに週末うち来いよ」

「いいけど……」

毎週金曜日の予備校帰り、照太は綾瀬と駅前のファミレスで『勉強会』と称して、一週間分の授業の内容や小テスト等を復習し、お互い分からない部分を教え合うことにしていた。とはいっても綾瀬は照太なんかよりよっぽど優秀なので、主に照太が教わりっぱなしになるのだが。

「ところで……帰ってきたんだって？ まどか先輩」

照太はビクツと体を揺らしたが、まっすぐ前を向いて歩いている綾瀬は気づかなかった。

「都内の大学行ってんだろ？ たしか四回生だったよな……なんでこのタイミング？」

「……さあ」

「ま、あの人のことだから、なにか考えあつてのことだろうけど……お前もう会ったの？」

「……店に来たから」

すると綾瀬はあからさまに顔をしかめた。

照太はますますマフラーに顔をうずめてしまう。

「なんか話したの」

「……別に。たいしたことは」

「あの人にあんま会わない方がいいんじゃないかね？ 近所だからまったく顔合わせないってのは無理だろうけど」

綾瀬は知っている……照太がまどかに傷つけられたいきさつを。ずっと仲良くしていた幼なじみが突然冷たいまでによそよそしくなり、離れていってしまったことを。

落ち込んでいた中学生の照太と初めて友達になったのが、この綾瀬だった。それ以来ずっと二人の友情は続いている……照太は感謝すると同時に、綾瀬に対して借りがあるようにすら感じていた。

「綾瀬にはホントいつも心配かけちゃって……」

「よせよ。お前が鈍くて暗くてお人好しなのは今さらだろ」

そう、普段の照太はどちらかという引込み思案でお人好しな方だ。だが、まどかを前にすると反発心からか、つい冷たくてキツイ口調になってしまう。

「もう、あの人はカンケーないよ……」

「ふうん」

綾瀬の鋭い視線に、照太は気づかなかった。

花屋の店先は、すでにシャッターが半分閉まっていた。

「おかえりなさい。ずいぶん遅いね」

暗がりの歩道に漏れた黄色い灯りに、オレンジ色のブーツが一步踏み出た。白い花束を抱えたまどかが口元に微笑を浮かべて立っている。

「予備校だった？ 毎日御苦労さま」

「……」

「あの子は元気？」

まどかの言葉に照太はきよとん、とした。

「ちゃんと窓辺においてくれたんだね……さっき回覧板を届けに行つたとき見えたよ」

まどかの視線は、二軒隣のケーキショップ『あい』の二階へと向けられていた。そこでようやく何のことか思い当った照太は、それでも自信なさげに首をひねった。

「……サボテンのこと？」

「うん。きつとあの子も君の帰りが遅くて心配してるよ」

頭おかしいんじゃないかね、この人……？

「うん、きつと心配している……僕には分かる」

まどかは花束をブリキのバケツに移しながら、カフェオレ色の髪をゆらしてクスクス笑った。

「変な男に声掛けられてるんじゃないか、疲れて電車で寝過ぎしてるんじゃないか、とか」

「……予備校は駅前だし、だいたい女じゃあるまいし男に声掛けられるわけじゃないじゃん」

するとまどかは花束から顔を上げ、照太に向き直った。

「でも、君はかわいいから……心配だよ」

「ばっ……」

バカ言ってるじゃねーよ！

踵を返して去ろうとする照太の背中から「おやすみ」「とまどかのやさしい声が追いかけてきたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9530z/>

Flower Cake

2012年1月4日00時59分発行